

P ぶんがく 2007.5月

◆ 柏木隆雄 / 評

原野昇編

『フランス中世文学を学ぶ人のために』

(世界思想社、2415円)

中世文学に関する屈強の案内書

フランス文学千年の歴史で、「その約半分の期間が中世に属し」、「フランス文学の特徴となっているクルトワジーやエスプリ・ゴローワ、モラリテがすべて中世に発している」(原野「はじめに」)として、当代中世文学研究者の殆どが結集、詩、散文、演劇各ジャンルにわたる中世文学の醍醐味の屈強な案内となっている。いずれの論も単なる紹介を超えて知的刺激に富むが、とうてい全部は紹介できない。ほんの一例に第七章を見てみよう。

「シャルル・ドルレアン」(佐佐木茂美)、「ヴィヨン」(細川哲士)について、前者は自筆原稿の稀な存在が、王族ゆえの捕囚や帰国後の詩人貴族の自負を語るとして、その生涯と詩作を綿密に追ひ、後者は伝説的に既に了解されているかの如き詩人は「宙吊り」にして、テキストに重点をおき、「形見分け」『遺言』と著名詩を見るが、力が入るのは従来難解とされる『隠語によるバラード』で、論者はここにヴィヨンを解く鍵があると主張するようだ。「大押韻派」(西沢文昭)もこれだけ丁寧な紹介は初めてではないか。

「クレチアン・ド・トロワ」(渡邊浩司)や「トリスタンとイゾー」(天沢退二郎)の精細な紹介と論、『薔薇物語』(篠田勝英)の綿密な説、「写実的物語」(横山安由

美)の新鮮な情報、その他どの論も生彩に富むが、第I章から読んでいくと、各章、節、おそらくは執筆者同士示し合わせなどしてはないのだろうが、いずれもみごとに次の展開に繋がり、中世文学の流れの真髄に浸ることになる。

それは細かい点でも同様。天使や聖人に関して眼から鱗の記述に満ちた「聖人伝」(松原秀一)で、聖ステファノが投石で最初の殉教者となるのを目撃したのがサウロ、後の聖パウロであるとの記事(12頁)は、「ファブリオー」(福本直之)の『議論で天国を得た農夫』で、天国入りを拒否された農夫が、応対に出た聖パウロを投石の張本人だと閉口させる話(142頁)に暗に繋がって、思わず案を打ちたくなる。

ただ「オック語」(井上富江)と「トルバドゥール」(瀬戸直彦)がVIII章に来るのはどうだろう。素人考えで「フランス語の成立」(太古隆治)の後にオック語、「武勲詩」(原野、小栗栖等)の前にトルバドゥールという構成もあるのではないか。もっともこれは南仏文学を独立に捉えない誹りを受けるかも知れない。

IX章「フランス中世文学の手引き」(松原)の縦横な学説史と研究者への鼓舞、付録の「文献案内」(岡田真知夫)は、フランス古語の語彙、語法、電子化のテキストまでの行き届いた解説、詳細な年表(原野)ともども、全章、研究の峻厳と至福がひしひしと伝わる。個性豊かな20人の執筆陣を見事にまとめ上げた編者に、とりわけ大きな讃辞を捧げたい(文中敬称略)。(かしわぎ・たかお)